

ま え が き

都市！

村の暮らしにどっぷり浸ってフィールドワークをしていた頃、都市（人口1万強の町だったが）はどんなにか光り輝いていたことだろう！ ショー・ウィンドーに並ぶモダンな商品は美しく装いをこらした貴婦人のように、村から出て来たフィールドワーカーの目には身分違いの高嶺の花と映った。そのときの私の目は、じっとショー・ウィンドーの前に立ち止まって商品を見つめていた村人の目と同様に、妖しく輝いていたに違いない。そして、その町でただ一つのカフェの椅子に座ってミルクティーをすすりながら口にするハム・エッグの味！ 私の頭の片隅に大学でかじったことのあるドイツ語のゲミュートリッヒカイト（心地よさ）という語が浮かんてくる。私のアシスタントのキンジャロ少年は、明日は町だという日には、石鱗片手に川の中にジャブジャブ入っていき、体を一心に洗うとともに一張羅のTシャツとジーパンを洗濯したものだった。町へ出かけるというのは特別な行事であり、その日は、身を清め精一杯のおしゃれをして、町の連中の嘲りを買わないように準備万端整えて出陣しなければならないハレの日だったのだ。町ではピジン英語ですら粹に聞こえた。ハーゲン・タウンの若者達は、巻き舌のペランメエ口調でピジンを早口にまくし立てるのだった。そしてポート・モレスビー！ 生まれて初めてこの町に降りたった勇者の誉れも高いモゴイ・オガイエ老人は、行き交う車を前に、足がすくんで私が手を引かなければ道を渡れないのだった。そして、首都のスーパー・マーケットの食品売り場にどっさりと積まれた色とりどりの果物、野菜、肉、魚に囲まれて「アパー！ アパー！」と驚嘆の叫びを繰り返すのだった。教会の牧師・説教師・預言者達の描いてみせる天国も都市だった。それはヨハネ黙示録に描かれた新エルサ

レムで、「都の石垣の基は様々な宝石」で飾られ、「十二の門は十二の真珠なり、おのおのの門は一つの真珠より成り、都の大路は透徹る瑠璃のごとき純金なり」と称される。敬虔なクリスチャンは、最後の審判の後、この聖なる都市で永遠の生命を享受することを夢見て恍惚の念に満たされるのである。

一方で、都市は、小はスリ・万引き・かっぱらいの類から大は銀行強盗にいたるまで、殺人・強盗・強姦などあらゆる種類の犯罪が渦巻く悪の温床であり、夜になれば人通りはパタリと途絶え、自動車が時折行き交うのを除けば、闇に包まれたゴースト・タウンと化してしまう。私達、村からポツと出て来た田舎者達は、生き馬の目を抜くようなハーゲン・タウンの雑踏の中を、全身、ハリネズミのように警戒心を逆立て、目指す商品をあわただしく物色しては次の店へと急ぎ、昼はテークアウトのぶっかけめしやロースト・チキンとコーラとともに芝生の上に広げあわただしくかっこむと、帰りのバス（バスは山賊の待ち伏せを恐れて3時には引き払ってしまう）に間に合うよう、村で待っている家族のおみやげも含めて、再び店から店へと品物をあわただしく物色して歩くのだった。

町はパプアニューギニアのほぼ全土を覆う部族社会の大海の中に浮かぶ近代文明の孤島であり、そこでは近代文明にふれた部族民が引き起こす物質的・精神的化学反応が今日も激しく進行しているのである。そして、その変化は都市を起点として周辺の村々へと波紋を描いて広がり、村人達の外的・内的生活をも変容させつつある。すなわち、都市とは文明化の起点であり発信点なのである。

こうした都市の持つ文明史的意義を明らかにしようというのが本書の趣旨である。そのためには、太平洋の都市は理想的な条件を備えている。太平洋の島々は、白人が到来するまでは都市という人間集合の形態を持たない新石器文化の中にあった。太平洋に都市と呼ぶる社会的集合体が出現するのはようやく19世紀の前半、ハワイのホノルルやタヒチのパペーテにおいてであった。これらは、いずれも18世紀末、その全貌が明らかになった太平洋に交易や捕鯨の目的で訪れてきた白人達が寄港するポート・タウンとして始まっ

た。国家の規矩の外に自然発生的に生まれたこうしたポート・タウンは荒々しく放埒な船員達の酒と女への耽溺の習癖を現地社会にも広めていった。

こうした無政府状態にあったポート・タウンが西洋的秩序の下におかれるようになるのは、19世紀後半にプランテーション経営を目指して白人入植者が太平洋の島々に定着を始め、本国同様の法秩序を要求して以降のことである。白人入植者の要求は、当時、西洋諸国で支配的となりつつあった帝国主義の隆盛と結びついて、太平洋の島々を次々と植民地へと組み敷いてゆき、19世紀末までには太平洋の全ての島は西洋列強のいずれかの植民地となった。こうして国家権力の下に組み敷かれた、かつての混沌の市、ポート・タウンは今や、西洋的秩序を広布するための中心、すなわちコロニアル・タウンへと変貌した。

太平洋の都市が三変するのは、第二次大戦後の脱植民地化の流れの中で各島嶼が独立を始めて以降のことである。旧宗主国のたがいがつちりと組み入れられていたコロニアル・タウンからたがが外れ、はるかに弱くなった独立国家の国家権力の下で、太平洋の都市は再び新たな形で自生的展開を遂げてゆくのである。

我々が本書の書名を『都市の誕生』と命名したのは、太平洋における都市の出現がただ単に太平洋史にとどまらず、都市と文明の一般論において有する根元的な意味を、研究会を進めていく中で、痛い程思い知らされたからである。我々は、ファウストにならって「初めに言葉ありき」というヨハネ福音書の冒頭を「初めに都市ありき」と書き改めたい程であった。そして、こう続く。「都市は文明と共にありき。都市は文明なりき。」

こうした視座、すなわち文明史における都市というパースペクティブを共有しながら、本書は同時に都市の呈する万華鏡的とも呼びうる多様な相貌を、同時に明らかにしてゆく。トンガのアーカイックな宇宙論的中心としての都市、ヴァヌアツの邪術の跳梁跋扈する異界としての都市、パプアニューギニアの活力にあふれたビジネスと熱烈なキリスト教信仰の結合による国民文化生成の場としての都市、そしてソロモン諸島の祭儀運動が夢見たユートピア

としての都市などなど、都市という運動体が放射する人間存在の様々の次元と可能性が本書にはふんだんに散りばめられている。

都市と文明というテーマに関心のおありの読者はどうか御興味に応じて好みの章を開いていただきたい。そこには、今日も世界のいたる所で働いている都市という運動体と文明という有機体のエレメントが、原初の素朴さを帯びてきらめいていることだろう。読者が、このテーマを考えてゆくためのヒントを見出され、思考をより一層深められるやすがとなれば、本書の執筆者一同の慶びこれにまさるものはない。どうか、御一読を賜わらんことを。

なお、本書は『マタンギ・パシフィカ』『海洋島嶼国家の原像と変貌』に続くアジア経済研究所太平洋研究シリーズの第三弾である。前二著も本書同様、御一読いただければ、太平洋世界が近代史の時空の中に生命を吹き込まれ、立体的に浮かび上がってくるものと信じている。どうか、併せて御愛顧を賜わらんことを。

最後に、本書に結実した研究会において、常に変わらぬ知的ロジスティクスを担ってくださった立山愛子さん、本書の初稿を閲読し、的確な示唆を与えてくださったレフェリーの皆さん、そして、原稿を精密に読み抜き完成度の高い書物にしてくださった編集者の方に感謝の意を表したい。

2000年12月

塩田光喜